# 女手で500年の伝統を守っています

人生チャンネル48

東京都江東区の富岡八幡宮に、日本一の大きさを誇る神輿が納められている。その神輿を制作したのが、千葉県市川市の浅子神輿店だ。浅子神輿店は応仁年間の創業で以来、五百年の伝統を今に伝える。十六代浅子周慶社長にお話をうかがった。

## 富岡八幡宮に東京江東に日本一の神輿

## 土台が約一五〇センチ、二百人で担ぎます

「昭和二十四年に嫁いできてから五十年、ずっと神輿を見てきましたけど、富岡八幡宮にお納めした神輿は、本当に大きくて立派なものですよ」

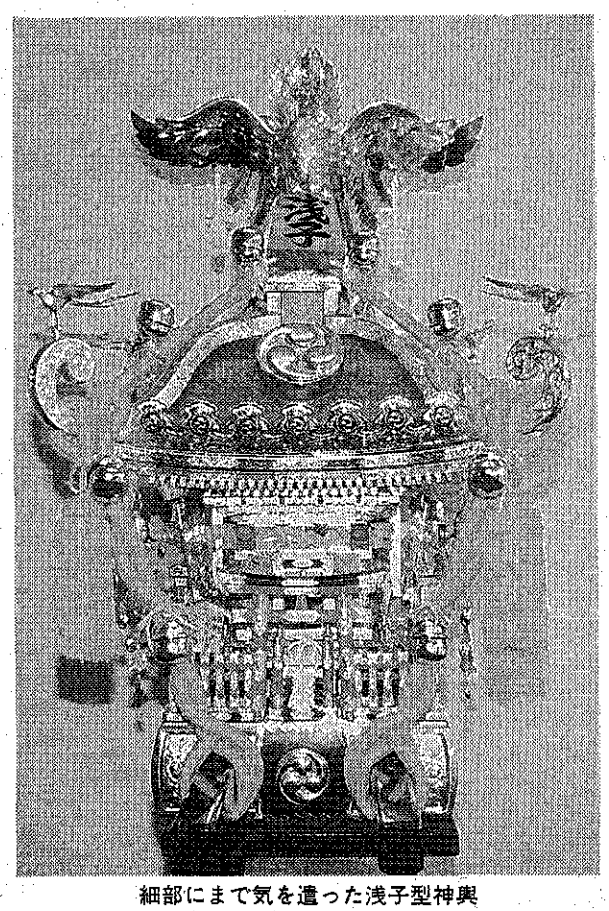
富岡八幡宮の神輿は、台輪と呼ばれる土台の部分が五尺（約一五〇㎝）もあり、屋根の上で大きく羽を広げた大鳥（鳳凰）も、ほぼ同じ大きさである。また、担ぐときも、縦に六本、横に四本の担ぎ棒で二百人もの人数で担ぐという。

その様は勇壮この上もなく、見るものを圧倒する。

「この五尺の神輿は、その大きさから、出すだけでも一苦労ということで、昨年、一回り小さい四尺五寸のものをお納めさせていただいたんですよ。

そんなものですから、その制作の時も、材料となる木材を探すのが、また一苦労だったんです。結局、材木屋さんをともなって、京都までかけたんですよ」

現在、五尺の神輿は富岡八幡宮の神輿庫に納められ、ガラス越しではあるが、昼間ならいつでも見ることができる。



細部にまで気を遣った浅子型神輿

## 神輿造り

## 先代の七夫と二人三脚の四十年 「周慶」絶やせぬと襲名しました

浅子さんは終戦間もない昭和二十四年、同じ千葉県の船橋から嫁いできた。

「船橋でもお祭りはとても盛んに行われていて、その神社の総代さんの関係で先代である主人と知り合い結婚したんです。

その当時は、戦争で東京は焼け野原、神輿もみんな焼けてしまっていてお祭りどころではなかったんです。それでも、復興が進むと、深川（東京都江東区）のお祭りを復興しようという話がでました。それで昭和二十六年、お祭りを愛する方々が集まって、なけなしの予算で神輿を制作したんです。それが徐々に広まって二十八年までには深川だけで十基の神輿を造りました。そうしたことで、新しい神輿の注文が殺到していまして、そのころは大勢の職人さんが寝泊まりして、それは大忙しだったんですよ。ですから、深川の神輿の半分以上はうちでお納めした神輿だと思いますよ」

以来四十年にわたって先代とともに営業からお礼参り、時には箔押し（金箔を張り付ける作業）までもこなした。

そして、平成元年、先代の逝去とともに、十六代浅子周慶を襲名することになる。

「先代と一緒にやってきた四十年がありましたから、浅子周慶の名を継ぐことにそれほど抵抗はありませんでしたね。また、まわりの職人さんたちも盛り上げてくれましたし、私の代で五百年続いてきた周慶の名を途絶えさせてはご先祖さまや、浅子の名を信頼して注文してくださっている方々にも申し訳がなくて……。

それに、神輿の修復の仕事もかかえていましたので、あれこれ考えている暇なんてありませんでした」

そうはいっても、やはり一番苦労したのはこの時期だった。

「先代は東京芸大で彫刻を学んでいましたので、そうした技術をそのまま神輿に活かしていたんです。ですけど私はそういった技術は何もないのでお客さまの要望をお聞きして、それをそれぞれの職人さんに伝えて造っていくんです。ですから職人さんに限らず、回りの方々が盛り立ててくださるおかげで成り立っている部分はとても大きいですね」

1つ1つが職人さんの手作業

## 造る方も担ぐ方も後継者育成を

浅子さんは終戦間もない昭和二十四年、同じ千葉県の船橋から嫁いできた。

「船橋でもお祭りはとても盛んに行われていて、その神社の総代さんの関係で先代である主人と知り合い結婚したんです。

その当時は、戦争で東京は焼け野原、神輿もみんな焼けてしまっていてお祭りどころではなかったんです。それでも、復興が進むと、深川（東京都江東区）のお祭りを復興しようという話がでました。それで昭和二十六年、お祭りを愛する方々が集まって、なけなしの予算で神輿を制作したんです。それが徐々に広まって二十八年までには深川だけで十基の神輿を造りました。そうしたことで、新しい神輿の注文が殺到していまして、そのころは大勢の職人さんが寝泊まりして、それは大忙しだったんですよ。ですから、深川のようなことだけはしないようにしています。ですから細かいところまで本当に気を遣って制作しています。

たとえば最近では、飾りの金具などは、プレスの機械でできてしまうんです。ですが、うちでは一つ一つ裏から叩き出していきますし、鳥居や長押（なげし）などの彫刻も一刀彫でやっています。

でも、だからといって一つの部品だけが目立ってしまってはだめなんです。なにしろ一つ寸法が狂えば組み上げることができないわけですからね。

それに、基本的な型はどの神輿店でもだいたい決まっているんですけど、お店ごとの特色を出したり〝もう少し屋根を大きくしてほしい〟ですとか〝色鮮やかに〟またその逆で〝白木のままで〟などご注文いただくお客さまの好みがありますでしょ。そうしたご依頼にできるだけ応える、また、一つ一つの仕事に心を込めてさせていただくことも大切な仕事なんです」

浅子神輿はその細工の細かさから、芸術作品とまでいわれるようになり、海外へも広く紹介されている。

また、昭和五十九年には株式会社浅子神輿店として法人経営に発展させたが、今後の展望はどうなのだろう。

「海外へは、アメリカ・フランス・オーストラリア・スペインなどへでかけて、各国との文化交流の場で幅広い活動を行っています。また、最近思うことは、神輿を見たことが無いっていうお子さんが増えていると思うんですよ。テレビなどでは見たことがあっても実物を知らないっていうことが多いようなんです。ましてや担ぐ機会はほとんどない。ですから、一人でも多くの人に担いでもらえるように、神輿の普及に努力していきたいと思います。

ただこれは神輿を造る側にもいえることで、昭和四、五十年代は戦後復員してきた職人さんが、技術的に向上してきた、いわば脂の乗っていた時代だったんですけれども、ここ数年で徐々に代替わりが進んできていますね。ですから、そうした若い職人さんに、浅子の伝統を伝承していくこともこれからの大きな課題です」

こうした伝統的なものは、跡取りの問題がついてまわるものだが……。

「私には四人の子供がおりますけれども、それぞれ他の職についています。無理やりやらせるものでもありませんし、まあ、本来が楽天的な性格なものですから、なんとかなると思っているんですよ」

そういって微笑む浅子さん。そこには五百年の歴史と伝統に裏打ちされた自信があるからこそのものだろう。

浅子神輿店
16代 浅子周慶さん (74)
千葉県市川市浄閑寺檀信徒

## 鳥居など今でも一刀彫りです

深川だけではなく、地元千葉県はもちろん、神奈川県にも多くの神輿を納めている。また北海道、九州などにも納めているが、その人気の秘密はどこにあるのだろう。

「人気の秘密といっても、神輿は基本的に、一度制作、納入すると、ほとんどの場合、修復はもちろん、つくり替えなども同じ制作者に注文がくるんですよ。だからこそ、そうした信頼を裏切るようなことだけはしないようにしています。ですから細かいところまで本当に気を遣って制作しています。

たとえば最近では、飾りの金具などは、プレスの機械でできてしまうんです。ですが、うちでは一つ一つ裏から叩き出していきますし、鳥居や長押（なげし）などの彫刻も一刀彫でやっています。

でも、だからといって一つの部品だけが目立ってしまってはだめなんです。なにしろ一つ寸法が狂えば組み上げることができないわけですからね。

それに、基本的な型はどの神輿店でもだいたい決まっているんですけど、お店ごとの特色を出したり〝もう少し屋根を大きくしてほしい〟ですとか〝色鮮